(壹)眞の紳士

椋野武吉

私が入店して初めて西川氏の謦咳に接したのは、明治三十九年で、まだ番頭さんの時代のことである、其頃の本店は榮町三丁目に在つて、商賣は樟腦、薄荷、砂糖、麥粉位のもので、店員も僅々三十人足らずであつた、西川氏は樟腦部の主任で其部下には、入店して間の無い楠瀬正一君と、金錢出納の傍ら一部の帳簿を手傳ふ淺田泉次郎君とが居つただけで、日々の手合から外國への引合、帳簿の記入まで一切を氏自ら行つて居られたが、字が達者で算盤が正確で、試算の合はぬなど云ふことは決して無かつた、其代り自分の擔當以外の事は見向きもせぬと云ふ風であつた、其頃洋服を着たものは、先年歿くなられた上田觀水翁だけだつたと思ふ、其他は凡て和服で、西川氏も結城か何かの着物に、角帶前垂掛けと云ふ服裝であつたが、極めて上品な上に自ら威嚴が備つて居つて、ボンサーンと蟠りの無い大きな聲で呼ばるゝ有樣が今猶ほ眼に見えるやうである、私は初めて會つた時の故でもあつたらうか、西

川氏の眞面目が此時代に最も善く現れて居つたやうに想はれて、深い印象が頭に殘つて居る。

其後支配人となられ、商賣の事から人事の方面に至るまで、全般の事を見らるゝやうになつたが、店の膨張發展と共に愈々練達の妙境に入られ、衆望を負うて刻苦勵精せられたが、其れだけ又一面に於て心勞も多かつたことであらう。

大正七年店の火災の頃から稍健康を害せられ、食事が進まぬと云ふので、毎朝諏訪山の温泉へ通はれた、私も此温泉へ行くのを例として居たので、能く温泉で一緒になつた、併し西川氏は朝非常に早い方で、何時も未明に出掛けられたので、其歸途に出會つたことも少くは無かつた、其後病氣が昂進して引籠らるゝ間際迄温泉を續けて居られたが、後で聞けば温泉の中で卒倒しかけたことが二三回もあつたと云ふ、今少し早く病名が判然して居つたならと思うて遺憾に堪へない。

西川氏の嗜好は煙草、趣味は書畫であつた、近頃は誰も彼も書畫を弄ばぬものが無い樣になつたが、西川氏はまだ世間で喧ましく云はぬずつと以前から、斯道に趣味を有たれ逸品を集めて居られた、そして鑑識が高く、多忙な支配人室に書畫を持

込んで來て鑑定を乞うて居る人をよく見かけたが、此れはいかぬと見れば、相手構はず手嚴しく貶しつけると云ふ風で、御世辭抔はちつとも無かつた、梅厓の書華山の畫等は最も好きだと云うて居られた、又脩竹と號し、竹を愛せられたことは、周知の事實だが、梧桐と棕梠も亦好きであつたらしい、庭前に多く植ゑられ、其書齋を棕梧書樓と名づけて居られたのでも判る、是等の趣味に稽へて見ても、其爲人が偲ばるゝ如く、極めて正しい眞直な氣象の裡に温雅な所があつて、眞の紳士とは正しくこんな人を指して云ふべきであると思はしめたのであるが、天壽を假さず、齡未だ知命にも達せずして逝かれたのは、返す返すも惜しいことである。

(三) 謹嚴、謙遜、報恩

水島鋏也

君は曾て東京高等商業學校に在學せられし故、余とは同窓なれども、在學の時代を異にせし爲め、互に相知れるは明治三十六年余が神戸に來住せし以後の事なり而して時折校務に關して交渉し、又は同窓會の席上にて面會せる位の事なりしを

以て君の平素の行狀逸事等に就ては多くを知る能はざりしと雖も、君と交際中に余をして最も深く感ぜしめたるは左記の三點なり。

一君は最も謹嚴にして、事大小を問はず決して苟もせざる風あり、從て餘り快濶に談論せず、又猥りに戯語すること無かりき、されど決して沈默家には非ず、其言ふ所簡にして要を得、雜談亦淡泊にして人をして毫も忌氣を催さしめざりき。

二君は至て謙遜家なりき、君が鈴木商店に支配人として在職中、同店より神戸高商に資金を寄附せられたること二三回ありし故、余は其都度謝意を表せむが爲め君を訪問せしが、君は一度も自己の周旋盡力を誇るの口吻を漏されしこと無く、是れ全く御校卒業生諸君の平素の働きに對し、主人及上役が同情したるに因るのみと言ひて、其功を他人に讓るを常とせられしは余の最も敬服せる所にして、斯の如きは謙讓の美德を備へたる人に非ざれば能はざる所なり。

三君は主家に對して常に犧牲的精神を有し、極めて忠實なる店員として終始一貫せられたる樣に察せらる、彼の歐洲大戰中我が商業界が振古未曾有の好況を呈するや、少壯の輩競うて獨立營業を開始せり、此時我校の卒業生にして鈴木商店に

在勤せる者の中一二名亦辭職して獨立せり、君之に就て余に語つて曰く、新卒業生が商業上眞に役立つ迄には少くも三五年の歳月を要す、其間會社は養成費として俸給手當等を支拂ひ居る次第なり、故に三年や五年にて去られては會社は資金を投じたる結果を收むること能はざる譯にて不利益甚だしきが故に、今後鈴木商店に就職せむとする者は容易に獨立自營せざるを條件と爲したきものなりと、是れ實に尤もなる事にて、余は度々商店の主人より之を聞きたるも、今回の戰時好況時代に於ては、會社商店の重要なる地位に在りたる人にして、轉職又は獨立せる者少からざりしを以て、會社商店の重役たり支配人たる人と雖も、此點に就きて他人を責むる資格を有せる人は實に寥々たる有樣なりき、此際君は頻りに青年の轉職を非難して毫も假借する所無かりしを見れば、君自身が獨立する杯の意思毫末も無かりしは勿論、斯かる行を以て大なる罪惡と考へ居られしこと明かにして、以て君の主家に對する至誠の念の熱烈なりしを推知することを得。

以上列記せる謹嚴、謙遜、報恩の諸點は、實に現今の青年に共通せる缺點なるが、君は此等の點に就て青年の爲に自ら模範を示されたりと云ふも決して諛言に非さ

るなり。

(三) 三十年一日

石橋爲之助

○私は西川文藏君と相識ること日尚淺かつたが、印象は深く記憶に存して居る。

○鈴木商店の火災後の假事務所を正面から這入つて、左にズツト往き當つて右へ折れる處に支配人室がある、其扉を押して中に入ると、直ぐ右手に事務用の高机に向つて何時も孜々と事務を執つて居る人があつた、是れが西川文藏君である。

○其机と直角に同じ形の机を前にして、丁度西川君と斜に相對して、事務を執つて居らるゝのが同役の森君である、二人の支配人は何う云ふ風に分業されて居るか知らないが、私が往つた時は大抵何時も森君は小切手に署名して居られて、西川君は他の店員と密々商談をして居られた、思ふに西川君は事務的の事柄よりも寧ろ商賣其物の懸引に管はつて居られたのでなからうか。

○打見たところ色白の優形で、髪が薄くなつて居られた勢か、額から上部が著し

く發達して居らるゝやうに見えて、思慮分別に富みて居らるゝことが容易く推測し得らるゝ、而して鬚の無い口元が引緊つて、言葉少なの相を現して居る、物を言はるゝ時は稍早口で、少し吃り口調である。

○謹直と誠實の二語は、恐らく西川君の全生涯を貫いて、其性格を言顯すに十分適合するであらう。「十年一日の如し」とは世間多くの場合に用ひらるゝ形容詞であるが、西川君に於ては單に形容詞でなく文字通りの意味で、「三十年一日」の如く此机に對して終始せられたのである、聞く所によれば、此三十年の間に店を離れて東京に往かれたのが、後にも前にもたつた一度と云ふことである、以て如何に店務に忠實なりしかを知るに足る。

○君は又無慾恬淡の人である、嗜好は煙草位のもので、此ればかりは一と時も身を離さないで、常に葉卷を口にして居られた、併し道樂として書畫には却々の鑑識を持て居られて、隨分蒐集もせられたやうである、時々支配人室で何處かの骨董屋が古い物を展べて、君の鑑定を乞うて居るのを見受けたことがある。

○私が君と食卓を共にした最終は、大正八年の秋陸軍大演習の此地方に行はれ

た際鈴木商店から外國武官を常盤花壇に請待された時である。同じ圓卓の周圍に南米ボリビヤの嚴めしき武官や、我陸軍の接伴官などと共に、奇妙なコントラストを見せて打興じた事が、今も猶ほ眼前に彷彿するやうである。

○大正九年の新年には、所謂亞米三の庭で君の健全なる姿を見たが、其後接觸の機會も稀であつた所、四月頃になつて、君が病氣の爲に珍しくも店を休んで靜養して居らるゝと聞いて、早速見舞狀を出したが、直ぐ折返して、「御蔭樣にて逐日良好に向ひ居り候間何卒御安心被下度候」と云ふ意味の禮狀を寄越された、それで日ならず快復せらるゝことと期待して居つたに、五月十五日に至り、突然其訃音に接して夢ではないかと驚いた、君が四月十五日の禮狀は、私に取つて貴重な君の遺墨になつたのである。

○君の筆跡は實に見事なものである、此筆力あつて始めて、君の鑑識に長じて居らるゝことの偶然ならざるを知るのである、日夜商賣の事に鞅掌しつゝある傍ら平素斯の如き高雅なる趣味と造詣を有せらるゝ君の人格は、實に奥床しく感ぜらる。

○若し夫れ君が鈴木商店の事業と其發展に貢獻せられしことの如何に大なりしかに至つては、君の訃に接して「償ひ難き損失」なりとの歎聲を發せられたる、金子君の一言之を證して餘ありと謂ふべく、君を片腕と頼みし金子君が、君の靈前に於て朗讀されたる弔詞は言々句々其肺肝より出で、眞に君を知りて熱血を君に濺ぎたる感謝の辭である。

○温乎たる君の容貌と音聲は、最早此世に於て見聞するを得ずと雖も、君の精神氣魄は、活きて我等の胸中に一種のインスピレーションを與へつゝある、私は靈の不滅を信ずるに依りて、亡き親や子や友に對する悲哀を緩和し得らるゝを幸福と思ふ。

(三八) 人格の人　鈴木伊十

未見の景仰

明治三十三年五月頃の事である、余が未だ臺灣總督府に在つて秘書事務を取扱

って居た時、恰も專賣制度施行に際し、余の机上には各方面よりの書類が堆きまでに集つて居た、其數多き書類の中で、圖らずも余の目を惹いた書類があつた、それは稍肉太の楷行交りの文字で、何となく他の書類よりは一頭地を拔いて異彩を放つて居る、最初は只うまい字だと思ひ、其うまいにつれて知らず識らず讀んで行くと其又文章が頗る美い、さて美い文章だなと思へば、又美い文字だなと思ひ、一種チヤームせらるゝやうにも覺え、又非常に氣品あるやうにも覺え、再讀三讀の後其差出人は誰かと見れば、神戸市榮町二丁目鈴木商店とある、恥しながら其當時官海の狹き片隅にのみ蹋蹐し居たる余は、神戸に於ける鈴木商店が本邦の商工業界に如何なる勢力を有することを知らず、唯此書類を見て鈴木商店には何處か普通の商店と異つた人が居ることゝ思ひ、折もあらば此文章を綴り此文字を書いた人に逢ひたくてならなかつた、丁度其頃懇意であつた後藤勝造翁に此事を聞て見ると、鈴木商店には金子といふ人が居るから其人に聞けとのことであつた、乃で金子氏が臺灣に來られたとき之を尋ねて見ると、文章を綴つたのも文字を書いたのも西川文藏氏といふことが知れた、それより余の腦裏には深く「西川文藏氏」といふことが印

象せられ、既に其名の知れた以上は又其人に逢はんことを希望するの念益々切なるものがあつた、然も西川氏は常に神戸に在り、余は常に臺灣に在り、互に其方處を異にし、偶々余の官命に依つて歸國することあるも、終始用務の妨ぐる所となりて面會の機を得ず、空しく未見の景仰裡に數年を經過した。

初會の感想

其後明治三十八年七月、余官を辭し身を實業方面に立てんと思ふ折しも、當時日露戰爭漸く末期に近づき、我も人も爭うて滿洲に赴かんとする際であつた、余も亦此機會に乘じて、何がな一働きして見んものと考へ、金子氏の袂に縋つた、其際金子氏の言はるゝには「役人から實業に移つても直ぐ役には立たぬ先づ頭から洗濯して掛る必要がある、それには何よりも亞米利加及歐羅巴に於ける商工業界の樣子を見て來るが宜しい、旅費は出して遣る」とのことであつた、然るに當時壯年血氣に逸り、且經驗に乏しき余は、歐米も見たくはあるが、さりとて滿洲に於ける或活動は此機を逸しては又と其機會を捉ふる能はずと淺墓にも速了し、是非共滿洲行をと强請した結果、金子氏も笑つて、「それ程熱心ならまあ滿州へ行つて見るも宜しから

う」とて、竟に滿洲行と決した、今でこそ滿洲行は何でもないが、其頃は戰爭中の事として、軍人軍屬以外の滿洲行はなかなか其筋の手續がむつかしく、鈴木商店といふ信用に由つて、辛つと渡航免狀が下附になつた、愈々滿洲渡航の期日も切迫したので余は金子氏に伴はれて先づお家樣に御目通を爲し、それより同氏の紹介により、茲に初めて西川氏に會見するの榮を得たのである、是れ實に明治三十八年八月四日午後二時頃であつたと記憶する、此頃本店の營業所は尙ほ榮町通二丁目に在つた唯見る左側事務室に幾多事務員を前二列に排置し、窓を左にし壁を背にしたる要處に席を占めたる、年齒正に三十三四とも思しき一紳士、これぞ余が數年來景仰し居たる西川文藏氏其人であつた、幹軀稍々小形に屬すれども其態度整然たるものあり、風丰溫乎たる裡に嚴乎として侵すべからざるものあり、和服角帶の瀟洒質實なる姿體は眞率なる實業家としての信用の程も偲ばれて、奥床しさを禁ずることが出來なかつた、これが西川氏に初めて遭うた刹那の直感であつた、さて一應初見の挨拶終るや、余は滿洲行の事を述べ「お氣附の事もあらば御指圖に預りたし」と云へば、西川氏は一寸傾首の面持にて「別に申上ぐる事もありませぬ、萬事は金子氏と

御協議下さい……折角御自愛專一に御奮勵を願ひます……御苦勞樣です」と話は此れだけであつた、氏や決して能辯の人でなく、又決して御世辭の人でない、其應待や寧ろ簡單にして質朴である、而も其簡單質朴の應待の裡、一種親むべく又冒すべからざる何ものかを有する、人格の人であることを感ぜずには居られなかつた、所謂巧言令色鮮仁矣とは。正に斯人の性格の正反對であることを感ぜずには居られなかつた……此れが初度の會見を了へた卽坐の感想であつた、其れより本店を出て歸る道すがらも、嘗て余が臺灣に在りて見たる西川氏手裁の書類の事、又久しき間の景仰の事など、今し方會見したる樣々の事を結付けては考へ、考へては結付け、結付くれば結付くる程、考へれば考へる程、愈々西川氏の人格の高いことが深く腦裏に印象せらるゝやうになつた……此れが初度の會見を了へて、本店より旅宿へ歸る迄の感想であつた。

愈々人格の高きを想ふ

滿洲より歸りて以後、余は全く東京住居の人となつたので、西川氏に親炙するの機會は餘り多くなかつた、時々用務を帶びて本店に行く都度、同氏に逢ふ位であつ

たから、氏の平素に於ける直接の知識には稍乏しい、併ながら余の知れる限りに於て、尙ほ各方面より聞得たる範圍に於て、左の五點は余の深く信じ且感佩措く能はずとして居る所である。

一終始一貫にして且一樣の人たること　凡そ人は其位地境遇の異なるに從つて知らず識らず之に化せらるゝもので、終始一貫と云ふことは非常に卓越した人でなくては出來ぬことである、此點に於て西川氏は當代稀に見る所の人であると思ふ、之に關する實例は枚擧に遑あらず、卽ち同氏生存中に於ける歷史全部が其れである、今極めて手近き一例を擧ぐるも、其日常の社交に於て余等の如き者に對せらるゝに其昔の西川氏も、其地位實力兼備へられたる其後の西川氏も、少しも變りたることなく、應接の態度挨拶の言葉使ひ等、天眞の流露する所……自家の地位あるが故に、他に對して聊かたりとも倨傲の態度あるにあらず、又他の身分低きが故に、苟且にも輕侮の言葉を用ひるにあらず……眞に一貫にして一樣である、斯の如き事は、一寸何でもないやうであるが、其實人世是れ程むつかしいことはない古來多くの英才人傑と稱せらるゝものゝ、一度は其地位を得て擧世觸目の的となな

るも、動もすれば其終を全くせざりし所以のものは、畢竟此終始一貫にして一樣てふ、人生の要諦を疎かにしたからであるとは史家の定言である、而も西川氏の終始一貫たるや、故らに勉めて此道に出づるのでなく、其自らに備はれる「德」である、想ふに鈴木商店三千内外の店員各位が、西川氏を尊敬し景慕する所以は、他にも幾多の原因の存するものあらんも、此「德」と云へる偉大なる包容力に因ること亦其一たるを信ずるのである。

二名聞を避け虛榮を嫌ふ人たること　方今の世、名聞を避け虛榮を嫌ふこと西川氏の如きは、蓋し其比を見ずと謂うて宜しからう、此事たる、前項に於ける終始一貫と共に、人生最も難しとする所である、名聞を好み虛榮に憧憬することは現代の通弊で、相當人格ありと目せらるる人も尙ほ「處世の關係上自家の存在を認めらるゝが爲に名聞は己むを得ぬ」として居る、然るに西川氏に取りては、名聞の如きは殆ど眼中に無い、否寧ろ絕對に之を避けられた、名聞既に此の如しである、其虛榮を惡み且之を嫌ひたることは言はずもがなである、所謂「功は之を人に讓り、責は己れ之を負ふ」是れ西川氏の先天的美質である、抑も鈴木商店の出資に係る各商事會社、其

數頗る多し、然かも西川氏は、本店支配人の外殆ど表面に其名を顯さぬ、必ず部下の店員又は後進者を導いて之を代表せしめて居る、之を他の富豪若くは其最高幹部が其關係會社の代表者を盡く獨占するものに比すれば、全く月鼈霄壤の差ありと云はねばならぬ、されば阪神地方は姑く措き、京濱方面に於ては、相當實業界の事情に通ずる者も、鈴木商店に金子氏に次いで西川氏の如き大人物のあることを知らぬ者が多い、西川氏の鈴木商店に於ける地位勢力は、彼の三井三菱に於ける元老と稱せらるゝ者以上であるも決して以下ではない、然るに世の實業通にして、三井三菱の元老あるを知つて鈴木商店の西川氏あることを知らざる所以のものは、其操る所守る所相異なるものあるからである、三井三菱に於ける元老の事は爰に云爲すべき限でないが、西川氏の操守せらるゝ所は、徹頭徹尾自家の爲にあらずして主家の爲である、商店の爲である、店員の爲である、故に其功績の大となるや、自家の大を爲さずして、主家の大を爲し商店の大を爲し店員の大を爲すのである、是れ名聞を避け虛榮を惡み、清廉潔白犧牲的精神に富める偉人にして初めて克く爲し得べきである、過般西川氏の逝去に際し、二三新聞紙に同氏店葬の廣告出づるや、或實業

家は驚異の眼を瞠りて余に向ひ「鈴木商店に於ける西川氏とは如何なる人なりや」と問へるを以て、余は余の知れる限に於て之に答へたるに、其人瞑目之を久しうしたる後「さても金子氏あり西川氏あり、鈴木商店の今日ある實に偶然でない」と感歎措く能はざるものゝ如くであつた。

三 清廉潔白にして犧牲的精神に富める人たること　此事たる、前項に於て略ぼ其要を盡したりと信ずるが故に、爰には單に一二の實例を擧げて置くに止めやう氏の清廉潔白の人たることは、常に氏を知る者の敬服して居た所であるが、氏を解する能はざる者は、如何に西川氏が清廉潔白であるにしても、鈴木商店と云へる大商店を背景として其支配人たる以上は、必ずや少くとも二三百萬圓の資産を有するに相違なかるべしと、然るに氏の歿せられたる後、其財産を整理した結果を聞くに、氏を解する能はざる者の豫想の外れたことは勿論、平素最も善く氏を知れる人の想像したるよりも、より夐かに清廉潔白である事が知られたのである、西川氏の清廉潔白の士たることは、其歿後に於て益々光輝を放つものと謂はねばならぬ、若し夫れ西川氏が犧牲的精神に富めることに就ては、爰に好一對の實話がある、數年

前の事、金子氏が胃腸を病んで當地の長與胃腸病院に入院せられたとき、病床に在るも病氣の事などは念頭に置かず、終始店務の事のみ心に懸け、際もあらば飛出さん容子にて「最う病氣は宜しいから退院する」とて聞かず、醫師より「貴下は生命と事業とどちらが大切ですか」と注意せられ、「生命より事業が大切です」と答へたること は、當時の逸話として今も尙ほ余の記憶に存して居る、蓋し金子氏の意、生命は固と自分のものなるも、之を主家に捧げたる以上は、主家の事業の爲に其身の斃るゝまで、自ら奮つて當らんとするの信念に外ならぬのである、曩に西川氏の病に罹らるるや、殆ど金子氏と其轍を同じうし、其病の漸むも意に介せず、斃れて起つ能はざるまで店務に從事せられ、且其病床に在りても、一意店務をのみ念とせられ、死の將に逼らんとするを知らず、現に去る四月二十日附を以て同氏より余に賜りたる書翰中にも「日ならずして全快可致と喜び居り候」とある、今にして想へば、氏の肉體は最早此時に於て死に瀕して居られたのであらう、而も其生命は事業の上に於て益々活きんとしたのである、主家の事業のため「生」をのみ思うて「死」を忘れられたのである、是れ實に貪夫をして廉ならしめ、懦夫をして起たしむるの一大模範と謂はねば

ならぬ。

四約束を確守し信用を重んずるの人たること　約束を確守し信用を重んずる事は、人の爲すべき當然の道である、乃ち當然の道であるに拘らず、違約背信は現時の社會に於ける常套事となつて居る、それも商工業の關係に於て、其責任の雙務に係るものは、約束も履行せられ信用も重んぜらるゝが、其責任の片務に屬するものに至つては、其不履行に終るものあるは世間有勝ちの事である、況して其約束の履行期が永きに亘るときは、殆ど忘却すること珍しからぬのである、此點に於ても西川氏は、他の企及し能はざる美質を有せられた、氏は啻に業務上に關する約束信用を重んぜらるゝばかりでなく、其個人關係に於て、單なる片務の責任にして何等氏の利益とならざるのみならず、寧ろ氏に取りて厄介極まる事であつても、必らず約束を果すの美質を有つて居られた、余は嘗て或後進者の身分上に就き西川氏に依賴したことがある、而も其事柄たるや、或る事情のため其當時後進者の身分を定めて貰うのでなくて、數年の後を期して是れ是れにして貰ひたしと云ふのである、云はゞ自分勝手の依賴である、我儘なる依賴である、然るに宏量なる西川氏は深く後

進者の境遇に同情せられ、快く此我儘勝手なる依頼を承諾せられた、是れ西川氏に取りて何等利する所なく、只厄介を脊負込んだのに止る、其後に至り余は、氏の記憶も或は如何あらんかと思ひながら、後進者の身の振方を請ひたるに、氏は卽坐に余に對して、「能く記憶して居ります、宜しう御座ります、必ず近日取計ひます」と、一語は千斤よりも重く、日ならずして此後進者は、西川氏の高配に依りて或方面に採用せらるゝことゝなつた。

更に西川氏が如何なる些末の約束にても、其責任の自己に係るものは之を疎かにせられぬ實例は、先年同氏が、其所藏に係る明の王鐸の「瓊心盧帖」を玻璃版に附し之を同好の士に頒たれたとき、余は某所に於て之を一見したるに、風韻雅趣掬すべく、垂涎の情に堪へず、其後神戸に至り西川氏と會したる際、談偶々此事に及びたるに、氏は嫣然微笑しつゝ、「お氣に入つたら一部進げましやう乎」と、是れ實は酒間の雜談、云はゞ約束にして約束にあらずである、既にして余は當地に歸り、俗事に趁はれ何事も忘却し居たるに、兩三日を經過し椋野氏の手を經て、一封の小包郵便が到着した、解いて之を觀れば實に「瓊心盧帖」である、是れ一は椋野氏の配慮にも因ること

であるが、西川氏が斯かる事まで約束を確守せらるゝ人たるに感佩せずには居られなかつた、人は取るべきことの約束は記憶の強いものであるが、與ふべきことの約束は忘却し易いものである、假令忘却せぬにしても之を果すことは普通人にはなかなか其勇氣の出ないものである、況や其約束にして約束たらざるをやである約束を確守すること、信用を重んずること、此點に於ても西川氏其人は永遠に光つて居る。

五　胸中閑日月を有する雅量の人たること　西川氏が人格の人たるに於て見逃すべからざる一事は、氏が大商店經營の任に當り、店務蝟集の裡に在りながら其胸中閑日月を有せらるゝことである、氏が如何程にまで書卷に親しまれたかは余も詳しく之を知らぬが、嘗て佛典大藏經のことに就き氏の考を或人に申送られた書翰を見て、其造詣の決して淺からざるに敬服したことがある、氏は又趣味性に富み風流韻事をも解し居られ、書畫就中書に至つては最も心を潛めて觀賞せられたことが窺はれる、氏の能書達筆は蓋し爰に胚胎したものであらう、されど氏の書畫を愛玩せらるゝや、世の一般富豪の書畫を愛玩すると異り、唯之を收藏して自分獨り

娯むでなく、殊に之を收藏するを以て誇とするが如きことは毫頭之なく、汎く同好者と共に之を娯まんとするに在る、故に同好者にして氏の藏品を觀んことを求むるものあれば、喜んで之を諾し、其珍品にして容易に得難きものゝ如きは、自費を投じて之を哥羅版等に複製し、同好者に分與することを樂まれた、彼の王鐸の「瓊瑤盧帖」の例の如き其一つである、要するに氏が、平素人に對すること寛にして己を持すること嚴なりし大雅量は、其胸中閑日月を有せらるゝより來るものであることを信じて疑はぬのである。

六最も人情に厚き人たること　智あるも情に乏しく、情あるも智に缺け、智情あるも意之に伴はず、意餘りあるも智情に由らずして妄に陷り易きは人生の弱點であつて、此三者は容易に具備し得べきものでない、然るに西川氏は此三者を最も圓滿に具備せられたる人格者である、前各項の事實は最も雄辯なる證人である、就中其最も人情に厚き人であつたことは、氏の在世中より余等の友人間に於ては、互に語り合うて美談として居た所である、惟ふに鈴木商店三千内外の店員各位は勿論苟くも西川氏と交を訂せられたる諸君は、必ず深く吾人と其感を同じうせらるゝ

こと丶信ずる、隨て今回森氏の企圖せられたる故人追懷錄の美擧に就き、各位より寄せらるゝ最も多くは此點に在らうと思ふ、されば不文なる余は、一々實例を揭ぐるの蛇足を避け、謹んで各位より其眞心を罩めて故人を追懷せらるゝ所の、淸新なる寄稿を拜せんことを期するのである。

最後の訣別

回顧すれば昨大正八年四月二十日の夜の事である、是れより數日前、余は或遠來の友人と共に神戸に赴き、用務も漸く結了し、將に翌日を以て歸京の途に就かんとした、此夕西川氏は此遠來の友人の勞を慰する爲に、莚を兵庫の「常盤」に開かれた、來り會する者は西川、森兩支配人、椋野氏、西岡氏外參名、之に遠來の友人に余を加へて都合九名(金子氏も出席せらるゝ筈なりしも俄に餘儀なき用務出來缺席)席は樓上に在り、座形は四角の一線を取除け、西川氏は窓を背にし、森氏は其左方に、爾餘の各位も順次其坐を占め、遠來の友人は床を後にして客席に着き、余は其次班を汚すの榮を得た、蓋し此莚や、唯友人遠來の勞を慰するの外何等意義を有せざるを以て、主客互に胸襟を披いて歡笑し、中にも酒に多くの嗜好を有せざる西川氏は、香りよき

シガーを吹しつゝ、談は漸く進んで、例のボルシエヴイズムの甚だ我帝國の爲め憂ふべきものなることに及び、それより談は更に談を生じ、興は更に興を添へ、氏は一同と共に最後まで最も愉快らしく席に侍せられた、既にして宴全く終り、氏は一同と共に玄關まで來られ、此處にて「さらば御機嫌よろしく」「左樣ならば何れ其内又……」と互に挨拶を換はして別れを告げた、今にして想へば、此莚席こそ西川氏と余との最後の訣別の莚となつたのである、翌日歸東に蒞み友人余に謂へらく、「余は今回の來神により西川氏と會見すること數回、最初は只普通の人とのみ思ひ、次回は何となく心持のよい人と思ひ、三回より如何にも人格ある人と思ひ、其度を重ぬるに隨ひ愈々人格の高きを加ふるやうに思ふ」と、余は之に對して「貴下も亦西川氏を解し得たる乎」と答へたことがある、其後余は暫く神戸を訪ふの機會を得なかつたから、定めて西川氏は健在であられることゝ思うて居た、然るに今春に入りてより、時々氏の健康前日の如くでないことを耳にしたが、店務には鞅掌し居らるゝとの事ゆゑ、今日の如き悲しき結果を見やうとは夢にも考へなかつた、既にして三月頃に至つては、或は稍々容體惡しきやうにも傳へられ、或は最早輕快に向はれたやうに

も報せられたが、何れにしても此時代は既に病床の人であることを知つた、因て早速見舞狀を出し、且其病症が胃腸に關することを確めたから、責めても病中の鬱を慰めんものと、氏の平素法帖に趣味を有せらるゝを想ひ、王羲之の「十七帖」……嘗て貫名海屋所藏の三節帖中太郎帖の複製に係る……を送つた、恭謙なる同氏よりは非常に叮嚀なる御挨拶狀に接し、却つて愧ぢ入る程であつた、卽ち前第三項の「日ならず全快可致と喜び居り候」との書翰は此時のものである、既にして鳥徂き花謝し、新綠露を滴らすの季節となり、氣候も順調となれるを以て、最早氏の病痾も全く平癒せられたるならんと思居たる矢先、五月十五日突如として、友人より驚くべき飛電は西川氏の逝去を報じ來つた、余は殆ど之を信ずることが出來なかつた、之を信ずる能はざるが爲に幾たびか電報を讀返した、而して更に直に電話を以て窪田氏に尋ねて見た、然も幾度電報を繰返して見ても、將又窪田氏に尋ねて見ても、西川氏の逝去せられたのは事實であつた驚異……呆然……自失……想ふに此一大悲報に接したる三千內外の店員各位は言ふも更なり、苟も知を西川氏に辱うしたる人々は、盡く同一の感に打たれたであらう、噫我畏敬する先進西川文藏氏は、大正九年

五月十五日、竟に四十七歳を一期として此世を去られたのである、併ながら氏の爲せる偉大なる功績は長へに生命を有して活きて居られるのである、其光輝ある人格は、永遠に最も尊き教訓を與へて居らるゝのである。

(三九) 些の俗氣無し

高倍權太郎

私が明治三十四年辯護士になりたての頃なりしが、西川文藏さんと云ふ方と三菱さんとの間に、宅地の境界の事にて行違が出來、三菱さんの法律顧問たりし私は西川文藏さんに對して民事の訴を起せしことあり、結局仲裁にて圓滿に片附きたるが、其後間も無く私は鈴木商店の法律事務をも取扱はせて戴くことになりて數年を閲する內に、西川文藏さんと云ふ方が鈴木商店の支配人になつて居らるゝことが判り、段々お近づきになる機會も多くなり、宅へ御招きしたこともあり、又時々參上して書畫抔を拜見したり又色々の御願せしが、何時も親切に待遇せられ、又物を贈られたり、法律の事に付私へ相談する樣御知人を紹介せられし位にて、私が嘗

て西川さんを訴へた事抔は一向に知らざるものゝ樣にて、小心なる私は陰かに忸怩たらざるを得ざりし。

私は西川さんとは事務上の御話せしことは殆どなく、只私交上相知るに過ぎざりしも、私の見たる西川さんは、品格高尚温厚謹嚴親切にして、書畫を好み些の俗氣無し、私は此の如き人を得て、時々往いて對坐數刻し、臭吝を洗はんことを望むも、最早爲す能はざるを憾みとす。

(四) 鈴木スピリットの權化

幸松文太

私が西川氏の知遇を辱うしたのは大正二年九月二十九日からであります、當時を回顧すれば、榮町一丁目のあの薄暗い事務所の階下で、理智に富まれた白皙の半面を電燈に照されて、「御苦勞さん」と言はれたことは今尚記憶に新たなる所であります。

其後六年有餘の間、氏の偉大なる人格から受けた印象は少くありませぬ、併し其

悉くは金子様初め先輩各位の御弔詞に盡されてありますから、私等が重ねて蛇足を加ふるは、反つて氏の德を傷けはせぬかと恐れます。

今や思想界暗黑に、財界混沌たる時期に際し、氏の追懷錄の刊行せらるゝは、吾々が今後の處世上の經典として、將た座右の銘として、後進者を裨益すること多大なるべきを信じます。

大正九年二月十六日、某件につき關東方面の調査を終り、復命の結果工場新設につき御同意を得、最後に御苦勞だつたと言はれたのが、今にして思へば實に最後の名殘でした、髣髴として氏の面影が頭に浮びます。

氏こそ眞に鈴木スピリツトの權化でありました、かゝる御方を亡き人の內に數へざるべからざることは、實に國家の爲め鈴木商店の爲め、惜みても尙餘りある次第であります。

(四) 一躍スキ燒通となる

亀井英之助

西川氏居常謹嚴、店務精勵を以て部下の推服する所たり、强て交際を好まず、餘儀

なき招待の外家庭の團欒を樂む、大正三年夏、突如として世界戰亂勃發と共に我國亦之に參加し、青島攻略の戰を開くに際し、陷落期の豫想當時世上の好題目となる會々一小僧回章を發し、十一月を期とし陷落に贊するものと否ざるものとを二組に分ち、敗者は勝者の命令通り一同を優待すべき條件の下に會員を募るあり、或は宛然袋の鼠一擧手の勞を要せずとするもの、或は旅順の陷落より早しとせんも相手は頑强の獨軍なるを以て左程容易ならずとする思索家あり、甲論乙駁遂に早しとするもの十五、遲きに與するもの七を算す、幸にして皇軍の向ふ所如何なる强敵も施すの策なく、十一月七日憐れ青島陷落の號外吾人の耳朶を打つに及び、硬派の意氣正に衝天の概あり、軟派は案に相違の小人數の故を以て、牛肉の散財にて容赦せんことを要望す、西川氏硬派の中に在り、未見のスキ燒屋征伐の聲を聞て聊か不安の色ありしも約反くべくもあらず、勝者の權利として出席の餘儀なきに至る、暫くにして一行相生町の三輪亭を襲ふ、名こそスキ燒屋なれ清掃せる客室は大小多數を算し、庭園の泉石布置凡ならず、亭主の經營策は清楚たる仲居の服裝にも及び料亭として捨て難き雅味なしとせず漸くにして馬飲牛食、興旺するや西川氏、初め

てスキ燒屋に登り近來の美食を擅にせり、家庭のスキ鍋何すれぞ其及ばざること遠きやとの自白歎聲を聞くに及んで、衆呆然、蓋し氏の品行の一端を反影して餘蘊なしと云ふべきか。

氏此快感は印象頗る深かりしにや、更に週日ならずして是れ亦未見の元町三輪亭に敗者を慰安するの動議に賛せられ、茲に青島の陷落は、西川氏を驅つて一擧に神戸名物のスキ燒通たらしめたり。

顧れば其れも今や一場の夢、秋風來らずして梧桐の一葉已に落つ、慘何ぞ堪へん嗚呼天公果して是乎非乎、轉た人生朝露の嘆を爲すのみ。

(四) 君と梅厓と家父

芳川筍之助

眞に光陰は矢の如しである、私が兩親を呼寄せ住居を神戸に定めたのは二十年前の事であつた、乃ち明治三十四年十一月である、宅は中山手通七丁目で、丁度君の邸を見上ぐる所で、時々君の咳聲を聞くこともあつた、其頃は未だ君と面識を得な

かつたが、父は或日茶會の席で君と相識ることゝなつた、爾後度々君の藏幅を見せて貰ひ、其眼識の非凡なるに驚かされて詩を贈つた、其結末の二句に「欽賞元明蹟、幽人眼自青」とあつた。

以來父は君を新住地の唯一の雅友として往來し、茶莚又は慶事に、君の爲に毫を揮うたことも少くない、君は書に特別の趣味を持ち、畫も文人畫を殊に愛せられ、寫生は好まなかつた樣である、萬事に謹嚴なる方で、眞に純潔であつた、其徹底的性格は敬服の外は無い。

私の君を知るに至つたのは同三十九年五月で、君が茶莚を設けられた時に、家嚴と共に其會に列つた。

私が鈴木商店に這入つたのは四十一年で、其頃より父は全く失明し、君も亦店務多端を極め、自然風流の交際も途絶えて居つた、會々大正九年一月父の歿するや、無二の雅友を失ひしを傷まれ、追善の爲明春を期し一雅會を催さんと內々企て居られたのに、圖らずも幾月を經ざるに君も亦其跡を逐うて仙遊せられたのは、眞に傷悼の情に堪へぬことである。

是より先同年三月二十一日を期し、私は自宅に亡父の遺墨等を展觀し、君の來觀を約束して其日を待居りしに、其前日小松楠彌氏病歿せられ、君も其悔みに行かれたが、歸途心地惡しとて店に復られし時は顏色眞青で、終に私との約束を辭されたことであつた、此日より病床に就かれたが、經過は順調で次第に快方に赴かれ、君も人も遠からず全快を疑はなかつたことであつた。

病中私は亡父の遺墨中に、嘗て君が愛玩せられた梅厓翁の書幅、宋人蘇舜欽の七絕を書きたるものを發見し、之を贈つた、旬日にして表裝が出來たから見に來いとの知らせがあつた、直に往訪せしに、なかなか元氣で病を忘れられたる如く、之を床に懸け喜色滿面に溢れて居つた、談梅厓翁の事歷に及び、家父が嘗て其珍藏の同先生の臨本二冊を御目に懸けんと約束して未だ果さずあるを聞き、翌日之を君に屆けしに、非常に利益する所ありとて端書を寄越された、思はざりき後數日にして其訃を聞き、全く夢の樣な氣持であつた、此端書も絕筆の一として今は記念に貽すことゝなつた、君は最も梅厓の書を愛好せられし樣に聞いて居る、亡父も久しく梅厓に私淑し、翁の爲に追善の會を催したこともあつた、君と梅厓と家父との關係は奇

しき翰墨の因縁と謂ふべきである、聊か君の嗜好を記述して君を偲ぶ料とする。

(四)逸事の一二

齋藤熊三郎

噫西川文藏君長逝せられぬ、哀悼何ぞ堪へん、昨年の三月、自分が病氣で入院中故人の病氣と聞いて、若しや不治の疾患ではあるまいかと思つて、森君に書面を出し又故人にも御見舞申上げ、自分は殘念ながら現今入院中で親しく御目にかゝられぬが、病氣に負けてはならぬと元氣付けた處、君の病氣とは驚く外なしと直ぐ返事か來た、其れは代筆であつた、其後間もなく故人となられたのであつた。

故人は資性温厚篤實、而も事に際して勇往邁進萬難辭せず、人と交りて誼に厚く接する者をして春風の裡に在るの想あらしめ、常に知友の敬慕して措かざる所であつたのに、病むこと久しからず、親族知友の看護藥石も其甲斐なく、前途有爲の材を抱き、幾多洋々たる希望を遺して溘焉長逝せられたのは、眞に痛恨に堪へない次第である。

故人とは明治三十五年以來の知己にして、能く自分の蒙を啓發して呉れ、又常に自分の我儘を容れて呉れた大恩人である、今度故人生前の行狀逸事御編纂の企あるに際し、自分も其一二を擧げて之を不朽に貽したいと思ふ、

先年故人が上京せられた時、平素故人が最も好まれた書畫を賞するため、自分は今川橋なる杏雨先生の處に案内したことがある、故人は杏雨先生の藏する書畫數百軸に一々目を通し、やがて半日以上を費し、互に意氣相投じ、爾來文人墨客の交を結ばれた。

故人は多年終始一貫、鈴木商店の繁激複雜の事務に鞅掌し、常に寧日の無い身にして、よく其天禀を發露し、書畫の鑑識に於て終に一家を成すに至つたことは、克己精勵研究の精神に富みたる結果にして、斯くして修養せられたる故人の美德は、內外の敬慕を一身に蒐め、衆人の規範と爲り、相率ゐて以て鈴木商店の隆榮に貢獻したる所實に偉大なるもので、自分は其克く動中に靜ある故人の品性の如何にも麗しきに感じたのであつた。

又先年自分は岩城工場から依賴せられて、鏡ガラス五十枚の買入方を鈴木商店

に頼んだ事があつた、其れは皆故人の手を經て外國に注文せられたので、故人とは一枚に就き金貳拾參圓五拾錢と取極めて、合計金千百七拾五圓と思つて居つたのに、品物が到着した所が何ぞ圖らん、其れは金貳千貳百圓以上の仕切となつた、そこで其行違より生じたる差金千百圓の解決方に付き、自分は鈴木商店の二階で故人に談判を爲し、大分爭をしたけれども、故人はなかなか承知せず、初め君の依頼に依り無手數料にて世話をしたのに、今や行違を來したとて、一錢半厘も損耗として店に迷惑をかけることは、吾鈴木商店の憲法に違反する所で、君の言分は絶對に通す譯には參らぬと、頑强に主張し一歩も讓らぬから、自分は、此取引は貴方に於て外國との取引上手違もあること故、其缺損は之を折半し、其一半の五百五拾圓は鈴木商店の負擔とし、他の一半五百五拾圓は自分の損耗とする方穩當なりと負けずに主張し、兩々相下らず爭つて見たが、故人は尙少しも承知しないで、此爭は容易に止まなかつた、遂に此押問答の最中に金子氏が來られて、他人に頼みて他人に損をかけては男が立まいと言はれたから、自分は、其れなら御頼みあり、世にはボクキトクコウデンクレロと言ふ人も在りと聞く、然れば此齋藤にも、香奠として右の金五百五

拾圓を呉れて下さいと返せば、金子氏も餘儀なく自分の主張を通して呉れて、故人との爭も無事解決を告げたことがあつた、斯くの如く故人は平素温厚謙讓の人であつたが、一旦事に當れば公私の別を明かにし、公事を斷ずるに私情を以て苟もせず、嚴として冐すべからざる所があつた、宜哉、故人は鈴木商店に在りて多年一日の如く精勵恪勤、熱心忠實に努力せられ、善謀善智にして滿身是れ膽なる金子氏、細心周到にして理財の良器たる柳田氏、此兩將の女房役として內に外に克く其補佐の重任を完うし、鈴木商店の大業を成さしめたことは、決して偶然のことではない、全く故人の豐富なる經驗と、深遠なる力量と、崇敬すべき性格との然らしめた所であると信ずる。

今や幽明境を異にし、温乎たる風丰復た見る能はず、故人の行狀逸事を編するに當り、往事を追想すれば哀別の涙轉た禁ずる能はず、茲に逸事の一片を陳ね、謹んで之を後世に傳へたいと思ふ。

五月雨や何ともいはず手向草

(四) 故人と石鴻元

重永壯輔

故西川君から非常な御世話を受けた男に墨竹畫家石鴻元と云ふがある、石鴻元は伊豫の人續木介壽氏の雅號である、家は素より貧窮であつたが、彼れは畫が好きな所から夙に志を立てゝ東京に出た、さうして或畫師の許に小僧奉公に住込んだが、掃除などのみさせられ思ふやうに畫を學ぶことが出來なかつたので、罷めて辭し去つた。

一時困難したが、如何なる譯であつたか、前政友會幹事長江藤哲藏氏と知合になり、弟子二人を伴れて同氏の許に寄食することゝなつた。

其時彼れは少しは獨立して畫を描き得ることになつて居たので、江藤邸の門に麗々しく「石鴻元」の表札を掲げた、角力が好きで時々江藤氏と角力を取つたこともあつたさうである、其後江藤氏は熊本に育英塾を開き、東京に其合宿所の樣なものを設けたので、彼れも此合宿所へ行つて遊んだり畫の稽古をしたりして居た、其間

の彼れの生活が面白いと云ふのは彼れは、どうも畫ではいかぬから、奮發一番米國に渡つて勞働に從事しやうと思ひ、旅費を造る爲めに、且は畫の稽古をするに必要な資金を造る爲めに、うんと働いたことである、車も挽いた、牛乳をも配達した、江藤氏は政黨關係があるので、選擧の時などには同氏の車をも挽いたが、畫時には共に牛肉屋に登り、一つ鍋をつつ突いたやうな譯で、人皆驚異の眼を瞠つたと云ふ。

斯んな生活をして金は多少出來たが、淡泊な男なので江藤氏の話によつて其金を他へ貸出した、處が遂に回收されなかつた、で彼れは自暴自棄になり、もう一切働かぬと言つて何もしなかつた、江藤氏の困つたことは一方でなかつた、丁度其時、横濱原六郎氏の處に書生が要ると云ふので、江藤氏は、原家では閑が多く畫の稽古が出來るから、行つてはどうかと云つて欺して彼れを遣つた、原家はなか〳〵廣く庭の草取も二三十人雇はれて居たが、夫人が鎌倉へ行かれた留守中、彼れの扱ひは寛大なもので、夫々賃銀を高めて遣つたのみか、毎日來られなければ來なくとも可いと云ふやうな調子だつたので、夫人から御叱りを蒙つたさうである、斯うして二年許り居たけれども、雜務に忙殺されて碌々畫の稽古も出來なかつた、其れで又復暇

を貰つて辭し去つた、現に原家には崋山の名幅が藏せられて居るが、此れは彼れの勸めに依つて購はれたものである、又彼れは、原家から書物や衣類など種々贈られたが、貰ふべきでないと云つて送り還したさうである、彼れが歸つて來たので、江藤氏は復た困つた、遂に新潟へ畫を描きに遣つた、處が折角畫を描いても、周旋屋が勝手にしてしまつて、金を吳れなかつたので流石の彼れも憤つた、さうして大に困つた、細君は伊勢の人であるから、細君を伴れて其鄕里黑田村に引込んだ、住居と云つても六疊一間の壞れ小屋で、土壁は孔明き、障子は破れた儘と云ふ有樣、而かも其處で四五人の子供が育つて居た、名古屋に畫を描きに行つて居た時分知合になつた人が、往訪したけれども、色々の物が天井に吊してあるので、危いとて室に入らず、逃げるやうにして立歸つたさうである、斯くて彼れは歸鄕後何もせず、好きな魚釣りのみして一年許り遊び暮した、其爲め支拂はねばならぬ所の米代味噌代等が少からず嵩んで來た、併し彼れは支拂ふことが出來なかつた、債主は細君の親許に請求に行つた、偶々細君が此事を彼れに漏らしたので、彼れは奮然として起つた、筆と墨とを携へて家を出た、是れが彼れの神戸に來た抑々の初めなのである。

私の次席であつた臺灣銀行神戸支店副支配人荒木氏は熊本の人で、嘗て江藤の塾に居つた關係から、彼れの爲人や經歴を熟知し、私に詳細物語られたので、私も大に同情した結果、各方面に彼れを紹介するやうになつた、最初銀行集會所に彼れの畫を持參して吹聽したので、友人等が段々描かせて呉れた、尺五の絹本が拾圓であつた、安過ぎるから今少しく高く取つてはと云つても、頑として肯かなかつた。

元のミカドホテルを後藤が經營して居た時分、彼れは其壁や屏風に墨竹を畫いた、此れは江藤氏の關係で、彼れを愛して居た故長谷塲純孝氏が後藤に勸められた結果だと聞いて居る。

私は又金子氏に話して太鼓を叩いて貰うたが、金子氏や柳田氏には餘り畫心がない、眞に畫心のあるのは西川君である、私は夙くから西川君を知り、所藏の畫を見せて貰つたり、版に刷つた物を贈られたり、又畫の鑑定を賴んだりした關係があつたので、彼れを西川君に紹介した、處が西川君の意に合ひ、盛んに描かせらるゝことになつたのである、當時彼れは奥平野の林氏方に居たが、故あつて私の家に移つて來た、無邪氣で眞率であつさりした扱ひ易い男である、最も茶を好むが欲しい時は

自分で二階から降りて來て勝手に喫むと云ふ調子で、家人同樣にして居た、又食事は一菜主義で、いかほどあつても一菜より食べない、食べたくないのかと云へばさうではない、食べたいけれども食べない、贅澤な癖がつくと、家に歸つてから困るからと言ふのである。

西川君は大に同情せられたので、毎日のやうに往復して描かせて貰つた、且同情料も多かつたので拾圓のは貳拾圓も貰つた、或時も大きい唐紙の分に六拾圓下さつたので辭退した所が、袂へ捻込まれましたと云つて居た、斯樣な調子で五百圓餘りも金が溜つたので、彼れは何年分も飯代が出來たと云つて非常に喜んだ、そこで米を一年分も買ひ、着物も二三年分位纏めて買つた。

西川君は、尙一層奮發して勉强せよ、歸鄕しても直ぐ來いと勸められ、積極的に世話して遣らうと考へられた、其れで爾來彼處此處と廣く采配を振られた、指圖に從つて彼れは名古屋へも行つた、北海道へも行つた、門司、鹿兒島へも行つた、さうして臺灣が最終であつた、金は一遍々々私に向け爲替にして送つて來たので、いつも臺灣銀行の定期に入れて遣つた、積つて貳萬圓にもなつたが、拂つたものは筆代、絹地

代、紙代位で、他は皆彼れの所得に歸した、彼の六疊一間の小屋は年六圓の家賃で借りて居たものであるが、其れを二三百圓出して買つた外、年に十二俵の收穫ある田地をも買入れた、思へば是れ皆西川君の深き同情の賜である、さうして彼れは西川君と私とを結び付ける階段と爲り鎹と爲つた譯であるが、斯くて同君と私との交情が從來に比し一層敦きを加へ、かたみに情緒が融和して、水も漏らさぬ間柄となつたのも實に不思議な因緣である。

嗚呼大正九年五月十五日、私は其三日前親しく西川君を其病床に訪れて、御病狀が段々輕快に向はれて居ることを知り、御全快が近い中に在ることを信じて居た然るに此日突然「西川さんが亡くなられたさうです」と聞いて、私は夢かとばかり驚き眞實とは思へなかつた、取るものも取りあへず、偶々來會はせ居たる石鴻元を伴ひ、西川邸を往訪して初めて眞實だと判り、痛歎措く所を知らなかつた、彼れ石鴻元が親の喪に値つたやうに慟哭し、私も貰ひ泣きをしたが、是れ決して偶然では無いのである。

茲に故人の德風を欽仰するの餘り、私と石鴻元、石鴻元と西川君それから西川君

と私との關係を敍して、鈴木商店の柱石の一人であつた故人の、私生活に於ける隱れた美談を御紹介申すと共に、虔んで故人追懷の微衷を表する次第である。

(四五) 故人の動中靜、靜中動

柏田忠藏

何千といふ店員の末席、殊に母國を離れて支店出張所に勤務して居る吾々が、本店の重役方に昵近することは、先づ自己の服務上極く好い事か惡い事の出來した時の外、其機會の尠いのが普通である。自分も入店後直に朝鮮に在勤して約四ケ年を經過し、其間珍香も焚かず屁も放らずの類で、重役方に呼付られて譽められたことも無ければ叱られたことも無いし、又店用で其後四五回本店に行つたこともあるが、別に要件も無いのに一々重役方に面會を求めて、貴重の時間を空費するは互に阿房らしく、何時も失敬して居るので、未だに柳田重役、森支配人の謦咳にも接せねば金子重役の顏さへ知らず、配下として誠に不都合な譯だが、自分は何か大事件でなければ滅多に重役に會はぬと腹を極めて居るから平氣である。處が故西川支

配人だけは、前後二回面會して親しく其風貌言語に接して居るのが今更不思議にも想はれ、又再び見ゆることの出來ない今日、よくこそ生前會つて居たと思ふと同時に、自分の會つたことが同支配人の故人となられた因緣でもあるかのやうに感ぜられて、愈々滅多に重役方などに會ふことではないと、自分の宗旨を固くして居ることである。

處が其前後二回の面會で、大なる感化を受けたのである、最初面會したのは大正六年四月自分入店の際である、今支配人が會はれるからと、當時の人事係西村さんに言はれて、二階の應接室に待つて居ると、間も無く何か書類を手に持つて忙しさうに這入つて來られたのが、ラケットの樣な格好の顏の、丈の高い西川支配人であつた、成る程と點頭かれる樣な服務上の色々な注意を、無造作に吃り吃り早口に話される間も、其書類に目を通して頻りにサインか何かして居られた、其時自分は、支配人ともあらう此人は實に粗忽な人だな、入店者に對する每度の事で、殆ど機械的に、せうことなしに自分に應接して居られるなと思はされ、何だか不快な氣がしたが、然し聽いた事柄は實際服務上の要件で、決して嘘言や戯語でなく、又書類の方も

眞更見榮や體裁で弄つて居られる樣には勿論思へぬ、すると書類を整理することと店員へ注意を與へることが、同時に完全に行はれて居るのだ、餘り立派でない脊廣に包まれて居る其胸の中には、吾々の測知し得ない別な大要件が考慮されつゝあるのかも知れぬと思うた時、自分は急に偉大な感化を受けたのである、そして階上階下の事務室で、熾んに響く電話の鈴や靴音の雜然たる中に、適確なる掛引と取引が行はれて居ることを想像して、最早自分は尻に鞭れたる悍馬の如く、趨つて任地に赴きたくなつたのである。

第二回目は昨年の二月中、自分が釜山出張所を預つて居た時分、或商品に付京城支店と下關支店との販賣區域上の件で、自分の意見を具陳して適當の處置を仰いだときの事である、其時西川支配人は、京城支店に屬する係員として左樣あるべき筈だと自分の意見を贊同されたかと思ふと、實行に付ては下關支店と直接圓滿に交渉するが可いとうまく拔けられたのには落膽したが、こゝらが對手の調子を害せぬ商人の秘訣だなと思はせられたものだ、僅か十四五分間の例の無造作な談話であつたので、餘り熱心に聽取しても貰へなかつた樣にも察せられたし、好い加減

な應接の樣にも思はれて頗る賴無く、又既に下關支店に交渉して出來ぬからこそ態々本店まで來たのであるにと思ふと、腹が立たぬでもなかつたが、兎に角其儘引取り、其足で今一度下關支店に寄つて見ると、意外にも其件に付て本店から下關支店長西岡氏宛ちやんと委細の手紙が來て居たものだ、自分の要求の一部が叶つたのは其れから間もないことで、他からは別に氣にも留らなかつた樣に見える些細な事でも、故西川支配人の腦裡にはちやんと捕捉と成策があつたのである。

以上の二件は、故西川支配人が動中靜、靜中動を得て居られた一反影で、生前總ての行狀逸事は推して知ることが出來ると思ふ。

(四) 溫情公平なる紳士

小宮小四郎

故西川支配人に就て語るには私は餘りに後進の身柄であるけれども、故人の德を憶へば敢て筆を執ることを恕して戴かねばならぬ。

私が鳴尾工場に勤めて居る頃、可なり長い期間作業を休止されたことがあつた

其間若い人達か無爲に暮すと云ふのも面白くないと云ふので研究の爲に各々專屬の執務關係の調査をして見ることになつた、處が其れが意外に尨大なものになつて了つたけれども、切角夜の目も眠らず書いた人もあつた努力に對して之を葬り去るに忍びないで、書下した原稿のまゝ印刷に回して製本してみた、すると其れが亦頗る頁數の多いものになつたのである、騎虎の勢で「工場便覽」と云ふ名前を付けて漸く嫁入らする算段は出來たけれども、初めの豫定とは段々變つて、こんな大仕事にならうとは思はなかつた爲、つい支配人の許を得る機會を失つて了つた、そこで豫約が取れて計算の見込が付いて配本するといふ時に、初めて情狀を打開けて許を乞うた、私の言葉が終ると支配人は、あゝさうですかと云つただけで、別段の話も質問もなく濟んだ、縱令大した金高の話でもないし、又咎め立てする程の惡戲でもなかつたにしろ、部下の人が斯ういふ事をやると、兎角の詮議立てをしてみたくなるのが一般だ、其れが當然私のやる仕事の樣に、此我儘な行爲を見遁して呉れたといふことは、鈍感な私でも肝に銘せざるを得なかつた、都會に居ても田舍へ來ても、尻の穴の小さい人達が尤もらしい顏をして、もぢやもぢややつて居る日本が

時々いやになることが多かつたけれども、この逝かれた支配人の樣な人に對すると、如何にも心持がよかつた、そしてどんな仕事でも喜んで働いてみたくなる樣な氣がした、人々の集りが多くなればなる程、理解ある公平……人達にも自分自身にも……と云ふことが一番大切なものではないかと思ふ、此春父に死別した淋しい私の心は、更に此公平にして温情ある、紳士の典型とも謂ふべき恩人を失つて一層眞暗になつて了つた、私は悲しい電報を受取つた其日一日は、眞に茫乎として爲す所を知らなかつた。

(四) 是れ有る哉

吉田實治郎

僕が入店匆々、一夜高倍辯護士と同道して書畫拜見に往訪したことがある、西川樣は君も書畫は好きですかと言はれ、心よく數幅を看せて吳れられた、崋山、梅逸、介石等の傑作珍品ばかりで、甚しく僕の眼を拭はしたものである、人は其趣味で其人の一半が察せらるゝと云ふが、當時僕は思うた、鈴木商店と云へば、辛辣慧敏を以て